©日本カムリ学会 2006
Bwletin Cymdeithas Astudiaethau Cymreig Siapan 2-1:33-39

研究ノート　カムリの国の地名研究：落穂拾い

Lloffion: Astudiaethau Enwau Lleoedd yng Nghymru

水谷　宏

Y Gainc Gyntaf：第1枝

Rhagair / プロローグ

地名研究の成果が、考古学、歴史学、文学や言語の研究といった分野にも応用され、そうした研究分野の発展に寄与するだけでなく、古代からの人類の生活や生き方、思想についての思わぬ情報を提供してくれて、その土地の一層の理解に役立つことは、改めて指摘するまでもない。地名研究は、それ自体、自律性のある学問領域である。筆者が、この学問領域に興味を抱いたのは、1970 年代半ばごろから80年代中半ばにかけて進めていた、カムリの国の中世騎士物語である『マビノーギ四枝』*Pedeir Keinc y Mabinogi* の邦訳・訳注の作業との関連からであった。さらには、1980年代から90年代にかけて、現地カムリ各地の農村を訪れての方言の現地調査との関連から、この方面への知的興味は一層深まっていったのであった。しか

©日本カムリ学会 2006
Bwletin Cymdeithas Astudiaethau Cymreig Siapan 2-1:33-39

しながら、自らの非力と怠惰を多忙な雑務のせいに置き換えて、正面切っての取り組みを後回しにしてきたのであった。

2003 年3月末をもって定年後の歳月を生きるようになった。世間一般では「第二の人生」などと呼ばれることもある。筆者自身にとっての第二の人生は、それまではイングランドだけしか眼中に置いていなかった人生から、1967年(当時 33 歳だった) 以降、「カムリの里に生きる」人生へと変換した時、既に始まった。そして、今なお続けてこの「カムリの里に生きる」という正に第二の人生を生き続けているのである。そして、地名研究という課題に向かって、やっと重い腰を上げる気持ちになった次第である。それには、次のような出来事が契機となった。

人生には、思いもかけない節目が存在する。一年半ばかり前のことである。私が住んでいる住宅の二階の住人のちょっとした不注意で、ちょうど真下に位置している私の書斎のすべての文献資料が水浸しの危険に晒されるという、とんでもない事態に遭遇した。「永年、苦労して収集してきた文献資料が. . . 」の思いから、必死の覚悟で、重い紙の資料を書斎から運び出し、幸い、資料を台無しにすることだけは免れた。その後、約二ヶ月かかった部屋の改修工事の間に、元に戻すための準備にと、いろいろな資料の整理に取り掛かり、「地名研究文献目録」もその中に含まれている。正に、「不幸中の幸い」そのものという他はない。

2005 年6月 22 日 (水) の中日新聞文化面に「消えゆく地名　古代史の証人」という見出しで、最近の日本では、市町村合併や区画整理などに伴い、古来の地名が消滅しつつある現状を指摘して、「効率や合理性の蔭で、大切なものを失っていないだろうか」の疑問を投げかけている。そして、古代史や考古学研究にも支障が出ているという幾人かの専門家の指摘も掲載されている。最近では、「道州制」が議論されているようである。

カムリの国も例外ではなく、それなりの事情から同様の指摘も可能だが、「効率・合理性」とは別に、表面にはっきりした形では現れにくい、この国ならではの歴史的な事情も微妙に絡まっているようである。カムリにおける地名の研究は、方言研究と同じく、エドワード・スイド Edward Lhuyd (1660?-1709) が実施した現地調査 (1697-99) に始まると考えていい。その後の発展も目覚しく、19 世紀から 20 世紀にかけて公表された地名研究の文献資料は膨大な数に上っているである。ジョン・フリーズ卿 Syr John Rhys (1840-1915)をはじめとし、イヴォール・ウィリアムズ卿 Syr Ifor Williams (1881-1965)、メルヴィル・リチャーズ Melville Richards (1910-73)、さらには、2 巻本の大著 *The Place- names of Pembrokeshire* (1992 年 The National Library of Wales, Aberystwyth 出版) を著わした B.G. チャールズ B.G. Charles といった先人の優れた研究成果が残されている。カムリの地名研究の成果は、そうした先人が残された著作から直接学ぶのが当然の方法でなければならないが、こうした資料を体系的に収集するとなると、相当な時間と費用とがかかるのは当然のことである。「解題」とまでいかなくても、せめてこうした文献のリストを作成する作業は、最近のようにコンピューターの操

©日本カムリ学会 2006
Bwletin Cymdeithas Astudiaethau Cymreig Siapan 2-1:33-39

作に堪能な若い研究者のご助力を得て、なんとか公表に値するものができそうだが、それにしても、5年や10年の歳月が必要であろうと推測している。「再び生まれて」12 歳となる今年、平均寿命までの人生すべてを投げ打ってみれば、何とかなるような希望的観測もなくはないが、色々な角度から見れば、「よほどの幸運に恵まれない限りは」の但し書きが付きそうなのが実情である。

そこで、英国大使館文化部給費生として、バンゴール市の北カムリ大学 Coleg Prifysgol Gogledd Cymru に滞在していた期間（1968年度）以後、何度か実施した方言の現地調査の傍ら、各地の大学図書館やアベラストゥイスの国立図書館等々で、手当たり次第入手した資料に、その都度、私なりの備忘記を添えたのが「地名研究文献目録」である。その中から、カムリに関するものだけを選んで、多少の手を加えたものが、「カムリにおける地名研究文献覚書 / Cofnodion: Astudiaethau Enwau Lleoedd yng Nghymru」として纏めることができた。本会の *Cylchlythyr* 第５号（本年３月末発行）以降に、別途、連載中である。収集当時、地名学に専従的に取り組む時間的余裕がなかった私自身の文字通りの「備忘記」Nodyn Atgoffa である。決して体系的ではないが、今回、連載するに当たっては、再度、原典に目を通して、私なりの確認だけはしておいた。また、現地で入手した資料の他に、1993 年度私大助成で、金城学院大学図書館に設置された「ウィリアムズ文庫」Llyfrgell Ifor Williams の中に見つけた重要なものも追加した。カムリの地名に筆者と同じように知的興味を抱かれる読者の方々に、少しでも役に立つならばの思いからである。「手当たり次第入手した」と言っても、方言調査との関連から自然に湧き出てきた知的興味に流されるように集めたのであり、そうした知的興味を起こさせていただいたのは、北カムリ大学で教鞭をとられていた（私自身は、留学当時は音声学専攻であり、残念ながら直接の指導を仰ぐことはなかったが）メルヴィル・リチャーズ教授 Prof. Melville Rechards の研究、*Welsh Administrative and Territorial Units: Medieval and Modern* (1969) であった。

「落穂拾い」は、カムリの言葉では 'Lloffion'［ソフィヨン］と言い、'yr hyn a gesglir â'r dwylo ar ôl y medelwyr' 「収穫者のあと、手で集められるもの」 *Y Geiriadur Mawr*「大辞典」と説明されている。また、カムライグ語辞典ではもっとも権威のある「カムリ大学辞典」*Geiriadur Prifysgol Cymru* の説明では、'yr hyn a loffir ar ôl y medelwyr neu'r casglwyr grawnwin, pigion, hefyd yn *ffig*.' 「収穫者のあとや、ブドウを取り入れる人の後に集められるもの、摘み残り、役得、比喩的にも」となっていて、「ブドウの収穫者」とか、「役得」の意味が加えられている。「ブドウ」'Grawnwin' の収穫の後であれば、さぞ多くの果実が落ちているだろうと思い、この説明も引用しておいた。それだけに断片的のようだが、その接点をつなぎ合わせていくと、結構、この国そのものや、この国のあちこちの土地にまつわる「真実」の一端に触れることもあるように思う。カムリのように、19～20 世紀の日本の「英国研究」の歴史においてはほとんどかえりみらることすらなかった国の歴史や文化を学ぶ上では、極めて大切なことだと認識している。

©日本カムリ学会 2006
Bwletin Cymdeithas Astudiaethau Cymreig Siapan 2-1:33-39

カムリの国を初めて訪れた日本人の多くの人達が、英語名とともにカムライグ語の駅名や地名が「併記」されているのを見て、驚かれる。特に、カムライグ語の地名には、英語名に比べるとかなり長いものもあり、どう読むのかも分からず、当惑されることが多いようである。こうしたことの背景には、そうした日本人には、カムリの国がイングランドの一部としてしか認識されていない事実がある。その上、カムライグ語が永年にわたって使用されてきた国であることへの認識に欠けることから、英語国だと勘違いして、カムライグ語が「併記」されていると思うのである。しかし、真実はまったく反対で、カムライグ語に英語が「併記」されているのである。しかも、日本でのように、観光客へのサーヴィスが目的で、日本語名にローマ字表記が添えられているのとは本質的に異なっていて、カムリの国では、「併合法」(1536 年) 以後 400 年以上の歴史における「傷跡」として、英語名が並んでいるのである。

本稿では、国名の「カムリ」や「州名」、「地域名」「市町村名」など、カムライグ語の地名の主要なもののいくつかについて、1) 読み方、2) 構成と言語的な意味、3) その由来、4) その地域や土地における歴史的・地理的意味合い、などについての「落穂拾い」を集めてみた。地名や人名ではないが、カイルフィリ Caerffili / Caerphilly という町の近郊で話されているカムライグ語の方言に、**'lloffion y ddafad'** (直訳すると、「羊 (dafad) の落穂」) という言い方がある。カイルフィリはカムリの国の南東部に位置する中モルガヌーグ州 Morgannwg Ganol / Mid Glamorgan の南東の隅にあり、南モルガヌーグ州 De Morgannwg / South Glamorgan との州境から 3 キロの距離の位置にある。そして、この土地の方言で **'lloffion y ddafad'** という表現で呼ばれるものというのは、「きのこ」'mushroom' のことなのである。多分、羊はきのこが大嫌いで、全然食べないで残してくれるので、後でたくさんの「落穂拾い」が楽しめたのであろうか。詳しいことは今は不明だが、本稿の連載が終わる頃までに何とか分かればいいがと願っている。

先ず、なにをさておき、シール・ヴォーン (英語名は、アングルシー島) にある、この国でもっとも長い名前と言われている「駅名」から始めよう。

1. *Llanfairpwyllgwyngyllgogerychwyrndrobwlllantysiliogogogoch*

この駅名の読み方は、[サン・ヴァイル・プース・グイン・ギース・ゴー・ゲル・ア・フイルン・ドゥロ・ブース・サン・タシリヨ・ゴゴー・ゴーホ] である。どういう意味かというと、「聖タシリヨ教会の、赤い洞窟のそば、急流が渦巻いているところにかなり近く、白いハシバミの木の窪みがあるところの聖メアリー教会」ということになる。この駅名が自然に言えるように、カムライグ語の発音習慣に慣れれば、カムリの国のどの地名も簡単に発音ができるようになる。

この地名は、「ブリテン島でもっとも長い地名」 the longest place-name in Britain と呼ばれている (世界中では、他に、もっと長い名前があるとのこと)。

©日本カムリ学会 2006
Bwletin Cymdeithas Astudiaethau Cymreig Siapan 2-1:33-39

駅名にもなっていて、カムリの国を訪れる多くの観光客が、この駅を訪れて、驚いている。「アングルシー島」（英語名）は、カムライグ語では「モーン島」Ynys Môn（アニス・モーン）と呼ぶ。

まず、母音の数を数えてみる。下線を引いて示した。「二重母音」は１音に数えると、次のように、１８個あり、１８音節から成り立っていることがわかる。

Llanfairpwllgwyngyllgogerychwyrndrobwllllandysiliogogogoch
1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 音節

母音が音節の核になるから、母音の下に数字を挿入したが、全部で１８音節ある。

次いで、子音文字を数えてみる。カムライグ語では、ll と ch は、「あわせ文字」と言って、１音を表すので、１個と数えることにする。

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20
Llan fair pwll gwyn gyll goger y chwyr n d ro bwll

21 22 23 24 25 26 27 28 29 子音の数は２９音
llan dysiliogogogoch

従って、母音１８音＋子音２９音＝４７音からできている。しかし、-ai- のような「二重母音」一つを「２文字」に数え、子音の ll と ch も２文字に数えると、５８文字になる。従って、「１８音節５８文字」と数える人が多い。カムライグ語の音韻体系を考えに入れた計算では、１８音節、４７音になり、カムライグ語の音韻体系の特徴を全く考えないで、ただローマ字文字の字数だけを数えれば、５８文字になる。

さて、バンゴール大学のカムライグ語学科で主任教授をしていたジョン・モリス・ジョーンズ卿 Syr John Morris Jones (1864-1929) の説によると、この「ことば遊びは」、この長い名前の駅の近くにある小さな村、「メナイ橋村」出身の洋服屋が、19 世紀の中ごろに、観光客目当てに、面白半分に「でっち上げた」名前とのことである。文法的には多少奇異なところもあるが、150 年以上も使われると、この言い方が普及してしまったようである。

２．*Llan-* で始まる地名について

カムライグ語の地名のつづり字についての「文章語」としての標準化を目的とした作業が、カムリ大学ケルト研究部会 Bwrdd Gwybodau Celtaidd Prifysgol Cymru の「言語・文学委員会」Pwyllgor Iaith a Llenyddiaeth で進められた。その成果を纏めたものが、次の出版物である。

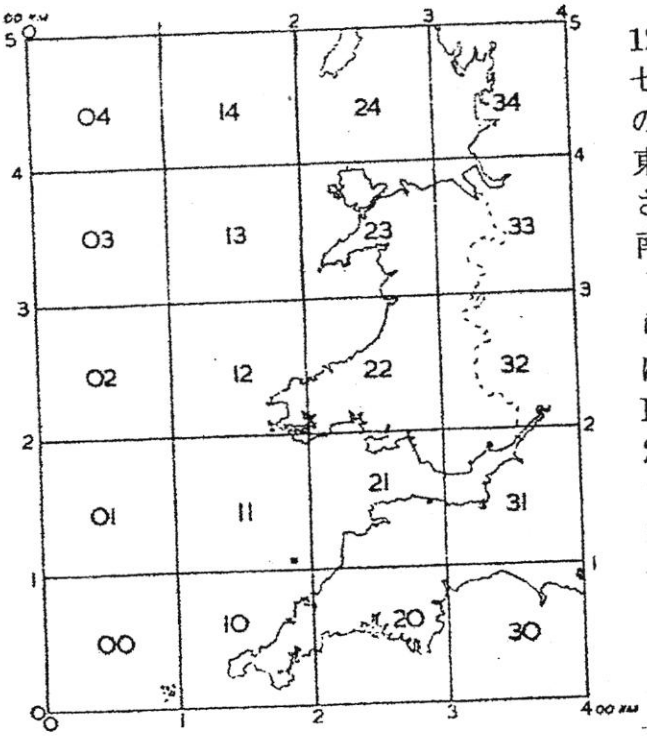
Rhestr o Enwau Lleoedd, paratowyd gan Bwyllgor Iaith a Llenyddiaeth,

©日本カムリ学会 2006
Bwletin Cymdeithas Astudiaethau Cymreig Siapan 2-1:33-39

Bwrdd Gwybodau Celtaidd Prifysgol Cymru, golygwyd gan Elwyn Davies, Caerdydd: Gwasg Prifysgol Cymru, 1975. (英語名：*A Gazetteer of Welsh Place-names,* prepared by the Language and Literature Committee of the Board of Celtic Studies of the University of Wales) — 以下、*Rh.E.Ll.*

地名の構成要素、地図上での位置づけの解説、発音に関する簡単な説明、地名構成要素約200語の英訳があり、119ページにわたり概算で7,800の地名が収録されている（カムライグ語のアルファベット順）。各地名には、教区、市町村、州（1974年の改訂以前の州名）が付されており、「カムリ及び西部イングランド英国陸地測量部地図距離座標系（100平方キロメートル）」Sgwarion mawrion (gyda ochrau o 100 km.) y Grid Prydeineg dros Gymru a gorllewin Lloegr / National Grid on Wales and western England (100km. sq.) による6桁の番号で、その位置が正確に示されている（地図1参照）。なお、同書が意図したカムリの地名のつづり字の文章語としての「標準化」に関連するいくつかの問題については、別稿にまとめて、本会の *Cylchlythyr* 第6号（今年6月末発行）に投稿する予定である。

地図1



左図に見られるとおり、カムリ全域は12/-, 21/-, 22/-, 23/-, 31/-, 32/-, 33/- の七つの「枡（100キロメートル四方）」の範囲に含まれている。東西は、西から東へ1キロメートルの間隔で100等分され、00/- の後の二桁の数字で示され、南北は、南から北に、同じく1キロメートルの間隔で100等分され、その後にさらに二桁の数字を加えて示される。例えば、1974年までの Caernarfon 州の Bangor は「23/5872」の地点で示され、23/- の区画内の、西の端から東へ58キロ離れた距離で、南の端からは北へ72キロ離れた距離の小さな枡内に位置していることが示される。

同書に収録されている地名のうち、因みに、どのような地名が多いのか、核になる語頭のことばで分類してみると、次のような結果が出た。

1）Llan「教会」531　2）Afon「川」338 (Nant「小川」108を加えると466)　3）Llyn「湖」164　4）Cwm「谷」127 (Dyffryn「(広い)谷」10を加えると137)　5）Mynydd「山」123　6）Aber「河口」91　7）Bryn「丘」75　8）Pont「橋」64　9）Castell「城」63　10）Cefn「(山の)背、尾根」56

豊かな自然に恵まれたカムリでは、「水名学」的地名の多いことが分かる。 同時に、第１位の *Llan-* 「教会」で始まる地名が圧倒的に多いことも分かる。

上記の「ことば遊び」の駅名には、２箇所の *Llan-* で始まる地名が含まれていて、冒頭の *Llanfair Pwllgwyngyll* と終わりに近い部分の *Llantysilio* (*Rh.E.Ll.* の標準化された表記では *Llandysilio* となり、*Llan-* の後での「緩音現象」(この場合は「軟音化」Treiglad Meddal) の規則が遵守されて、[t] → [d] となっている) とである。*Llanfair Pwllgwyngyll* は、「Môn 州の教区、村」となっており、地点は (23/5371) で示されており、*Llandysilio* の方は、「Môn 州の教区」(23/5473) となっている。(次号に続く)